

大久保利通の後半生(盟友並び立たず)

平成 30 年 9 月 23 日「志雲会」清見義郎



1. 明治六年の政変

岩倉使節団から帰国した大久保らは留守を任せた西郷ら留守政府が様々な改革(地租改正・徴兵制度・鉄道事業・学制改革・日清修好条規など)を成功させており、留守政府と使節団組の間には溝が生じていた。留守政府は開国に応じない朝鮮問題を解決すべく、板垣退助は派兵を主張し西郷はまずは自らが大使として説得にいくとの意見が分かれたが、明治政府は西郷案で決定した。これに帰国した岩倉・大久保らが時期尚早と延期を唱え、最後は明治天皇の裁可を仰ぎ、西郷派遣は延期となった。これに端を発し、西郷ら留守政府は政府の職を辞任、下野した。留守政府と外遊組との間には心情的と政策的不和が生じていた。心情的不和はこのままでは西郷中心の明治政府ができ権力闘争に敗れる恐れであり、政策的不和は西洋に追いつくための諸政策の違い。この後、政権を奪った外遊組が行った政策を見るとその一端が見えてくる、廃刀令(明治 9 年)・秩禄処分(明治 9 年)など早期の士分の解体で、欧米化を急速に推し進めようとしていた。

2. 西郷下野

明治六年の政変で辞任した西郷は参議・近衛都督・陸軍大将・位階の返上を申し出たが、明治天皇は陸軍大将辞職と位階の返上は許されなかった。その後桐野利秋・篠原国幹ら多くが辞任し帰県した。大久保は内務省を設置し、自ら初代内務卿となり絶大な権力を握り、上記の改革を次々断行して行く。この間、大久保は不平士族の不满をそらすため台湾出兵を行うが不正士族の反乱は収まらなかった。西郷は不平士族の受け皿として私学校を運営していき、また大久保は不平士族に一時的に職を与える事(台湾出兵)でその不满を逸らそうとした。大久保と西郷の不平士族に対する考えは違っていき、別々の方向へと向かっていく。

3. 佐賀の乱

明治 7 年に起こった江藤新平を中心とする不平士族の反乱。
佐賀の征韓党と憂国党が明治政府に対して物申そうとした反乱の首謀者に江藤新平が祭りあげられ、それを大久保利通自ら軍を指揮し鎮圧。その後、佐賀の臨時裁判所にてわずか 2 日で結審し江藤らは梟首。裁判制度を確立しようとする明治政府が何故前近代的(不公平)な裁判を行ったのか。不平士族の乱が他へ波及させない迅速な対応と事件を利用して政敵を追い落とす大久保の冷徹な政治的判断があった。西郷は逃亡中の江藤と薩摩で会談するが決起要請には応じず。これ以降、不平士族の乱(神風連・萩)は各個に鎮圧されていく。

4. 西南戦争

当時の薩摩は明治政府の言う事を聞かず、県令(県知事)の大山綱良も西郷支持でまさに西郷王国と言う状況にあり、中央集権を推し進める明治政府にとっては困った存在であった。西郷暗殺計画を契機に私学校は決起を決意し、西郷も「おいどんの身体を上げまつせう」と同意。当時、大久保

は、佐賀の乱・萩の乱でも協力を拒否した西郷が不平士族の乱に与するとは思っていなかったが、明治政府の木戸孝允らの不平士族を一掃すべしとの意見に押され鎮圧を決意するが、再度大久保は事態の收拾を図るため川村純義を派遣するも、取り巻きに囲まれた西郷・川村会談は実現せず、西南戦争が開始される。大久保は、何故直接会談をしなかったのか、直接会談に出向いて、会談が成功すれば西郷を救う事が出来るが不平士族はくすぶったまま残り明治政府としては大きな火種を残してしまう。また会談に失敗すれば命は取られぬまでも明治政府の要職から失脚し大久保の目指す近代日本の実現が遠のく、西郷も会談が成功しても士族が以前の士族に戻るわけでもなく、不平士族はどこかで残り暴発の危険が残ることを理解していたのではないか。戦争当時、無謀な熊本城攻略と言われているが、堅牢な熊本城攻略し、死守することで全国の士族の決起を促し、政府の士族切り捨ての方針を転換させるのが西郷の意図ではなかったか。または戦いに勝利する事が目的ではなくサムライの戦いを世に示す事が目的だったかも知れない。これ以降、両者は沈黙しお互いの立場・意思を理解した上で、事態は進んでいき、双方 6000 人死者を出し戦争は終結する。その後日本は急速に欧化政策を推進するが、西南戦争の薩摩軍の戦いを見て日本陸・海軍には精神性を重視する風土が残った。

5. 大久保の最後(紀尾井坂の変)

明治10年冬の西南戦争終結の翌明治11年5月14日、大久保は政府の要人暗殺計画があるのを知りながら、従者二人を伴い登城中に不平士族6名に襲われ暗殺。世に言う「紀尾井坂の変」である。大久保は暗殺計画があるのを知ないか。大久保の私財は借金 8000 円だけであったと言う。最後に大久保暗殺時懐中から西郷の2通の手紙を所持していたと言われています。それを紹介して終わりたいと思います。

●戊辰の春(明治元年1月22日)のもので、

鳥羽伏見の戦いの前に外国人が其の拳を悪く本国政府へ伝える様子を西郷は察して、王政復古の趣意を明らかにするよう彼らに説明するよう、大久保への周旋を望むという内容です。

●大久保が洋行の際、サンフランシスコで撮影した写真を西郷へ送りました。

その手紙の返信です。調べると明治5年2月15日付でした。

西郷が大久保の写真を見て、

「醜体を極まる、もう写真を取るのはやめなさい」

といった内容から始まります。

二人の関係が良好だった明治1年の頃、少しずつ違っていく明治5年の頃、どういう想いで懐中に入れていたのか。友であり最後のサムライであった大久保と西郷、その心のうちは本人達しか知る事は出来ないでしょう。

参 考 図 書 「翔ぶが如く」

司馬遼太郎

「逆説の日本史第22巻」

井沢元彦